

【体験記】

就活体験記

大森 隆暉¹・武田 光藍²

まえがき

本稿では、2022年度で科学史・科学哲学研究室の修士課程を卒業し、民間企業に就職する、大森隆暉と武田光藍の両名が行った就職活動について述べる。とりわけ本稿では、就職活動を選んだ理由や、就職活動の進め方、科史・科哲院生であることのメリット・デメリット、今後の研究への思い、といった側面について中心的に扱う。

このような体験記を掲載することの意義（そして掲載する理由）として、体験記に書かれている**内容**が持つ意義と、そしてこのような体験記を掲載すること**それ自体**が持つ意義の二つの側面を挙げることができるだろう。

まず、体験記の内容が持つ意義としては、科学史・科学哲学研究室に所属する大学院生が何を考え、どのように就職活動を行っていくか、という点に関してピンポイントで情報を提供できる点にある。大手の就活体験記サイトでは、投稿者のプロフィールは一般化された形（例えば、「理系、大学院生」など）でしか掲載されない場合が多いが、これに対して本稿では、（主な読者として想定される）科学史・科学哲学所属の大学院生に対して、過去に科史・科哲に所属していた、という点で非常に近いアイデンティティを持つ人の就活体験記を提供することができる。

次に、体験記を掲載すること自体が持つ意義としては、科史・科哲から民間企業へと就職した人が、科史・科哲の大学院生ネットワークとのつながりを維持する一助となるかもしれない、という点が挙げられる。すなわち、研究室の個人的なつながりのみに頼ることなく、誰でもアクセス可能な体験記を公開しておくことで、今後の大学院生ともつながることができるかもしれない。さら

1 東京大学大学院総合文化研究科修士課程。Email: ryuki.omori1126@gmail.com

2 東京大学大学院総合文化研究科修士課程。Email: maiuythemail@gmail.com

に、体験記投稿の試みがこの先の年度にも継承されていけば、本稿執筆者だけでなく、さらに多くの民間企業就職者とのつながりが、忘却されることなく維持されていくかもしれない。

本稿が、科史・科哲の大学院生に対して有益なノウハウを提供し、そして今後の就職者と科史・科哲大学院生間のネットワーク構築のための口火となることを願っている。

「願わくば、確かな情報や言論が重んじられる世の中へ」

大森 隆暉

0. 自己紹介や入社先など

フランスの（科学）哲学、とくにアンリ・ベルクソンの哲学を専門とする。主に、彼の生命論に関心をもち、当時の生物学や進化論との比較対照も通して彼の哲学を体系的に再構成することを試みた³。なお、学部時代は他大学の外国語系に所属しており、修士から科史・科哲に入学した。来年度より、大手新聞社に企画職（デジタル系）として入社予定である。

1.1 なぜ進学ではなく就職活動を選んだか

いわゆる将来への諸々の不安等も理由の1つではあるが、最も大きな理由は、

3 私の関心や研究内容を部分的に反映したものとしては、以下の研究ノートがある。
・大森隆暉（2022）「『創造的』である進化とは何でありうるか：ベルクソン『創造的進化』におけるエラン概念」、『科学史・科学哲学』第25号、28-43頁。

なお、修士論文では、上記の研究ノートの成果も織り交ぜつつ、「結局、ベルクソン哲学は自然科学と整合的なのか、それとも「反」自然科学的なのか」といった大きな問いのもと、ベルクソン哲学全体のエラン概念（および当該概念と連関するいくつかの諸概念）を整合的に解釈する研究を行った。

ただし多くの場合、以上のような研究内容を文字通り就職活動の場でアピールすることは望ましくない。これを避けるために私が行った工夫については、3.4 や 3.5 で詳述する。

研究以上に私がやりたい／やるべきことが入社先で見つかった点にある。それを予め述べておくと、「確かな情報や言論が重んじられるような社会を目指す」といったことが挙げられる。以下、これに至る紆余曲折を詳述しておく。

当初は、「就職するとしたら、いわゆる研究職のような、あるいは研究者の支援につながるような仕事に就こう」くらいの軽い気持ちで就職活動を始めた。したがって、マスコミ業界（とくに学術系の出版社や新聞社）や研究開発法人、学校法人を中心に見ていた。ちなみに、東大生が志望／入社しがちなコンサルティング業界⁴はほとんど見ていなかった。この業界における、様々な案件に関わりつつ多様な業務を長時間こなすというモデルケース的な働き方が自分には合っていないように思われたし、たとえ必ずしもそうではないようなコンサルティングファームとご縁があったとしても、そこで働くことは、以下で述べる私の「就活軸」よりも優先されることはないだろうと考えたからだ。

上述したような気持ちを抱えながら出会ったのが、今の入社先の職種だった。そこは、いわゆるデジタル化の推進や新規事業の提案を通じて、新聞記事の閲覧数や購読者の増大を目指す職種であり、一見すると当初の自身の働く動機からはかけ離れているように思われた。しかし、その職種の説明会で或る方が口にした「新聞記事に触れる人が増えたらこの世の中がより良くなるはずだ、と本気で思って仕事をしている」という趣旨の言葉から、大きな示唆を得た。より具体的には、たしかに私は研究者や学術活動一般の発展に大きく貢献できるような仕事に就くことを漠然と思い描いていたわけだが、そうしたものが発展するためには、そもそもそれらが重んじられるような社会であらねばならないと気づかされたのである。このような私にとっての理想的な社会、すなわち、確かな情報や言論がより重んじられるような世の中にするに少しでも貢献できるような仕事があるとすれば、他ならぬそれに挑戦してみたいと思ったのである。

ちなみに、私がこのような世の中にするに貢献できる仕事に就きたいと考えた大きな理由は、「研究者や学術活動一般が社会で広く肯定的に受容され、それらが発展するためになしうるいくつかの手段のうち、その仕事に就くこと

4 東大新聞オンライン（2022）「【22卒東大生就職状況】学部生首位は2年連続楽天 院生は4年ぶりにアクセントがトップへ」（https://www.todaishimbun.org/2021ranking_20220829/）。

が、少なくとも私にとっては最も有望で、自身が行うにあたって「向いている」ものだと直観したから」といった点にある。

しかし、ここで次のような疑問が生じるかもしれない。すなわち、そもそもどうして研究者や学術活動が重んじられるような社会であってほしいのか、と。もちろん、私は元々研究者志望であり、そのような活動への敬意や憧れがあったことも理由の1つである。しかし、そうしたものが重んじられてほしいと私が考える理由は他にもいくつかあり、(それらは科史・科哲としての私とはあまり関係ない内容かもしれないが)、少なくとも「就活軸」の決定を大きく左右したことに相違ないので、以下の注で補足しておいた⁵。

ともあれ、もちろん、マスメディアにおけるあらゆる分野の情報が学術活動の発展に直接貢献するわけではないだろう。しかし、この職種でなされる仕事は、広義には「より多くの人々が確かな情報や記事、文章一般にアクセスしやすいような仕組みを作ること」にあるのだから、その点では私の当初の動機とはかけ離れていないように思われた。

以上のような、いわば「そもそも確かな情報や言論が重んじられるような世の中であるべきだ」という点が私の「就活軸」——入社する企業や職種を決定

5 そうした他の理由を一言でまとめると、「そうした研究・学術活動に限らず、確かな情報や言論がより重んじられるべき場がいくつもあり、そうした場を整えることもまた研究・学術活動を支えることにつながると信じている」といったところになるだろう。たとえば、私は地方出身者であり、また、いわゆる偏差値の非常に高い高校に通っていたわけではなかった。そうした場においては、研究・学術活動はおろか、確かな情報や言論に基づいたニュースや書籍が出回ることすら困難であり、それによる学びへの障壁を痛感することも多かった。さらに、より就職活動に即した例としては、いわゆる教育（業界）への不満もあった。私は、ずっと個別指導塾でアルバイトをしていたため、就職活動の際には教育業界も視野に入れていた。しかし、その業界について調べるうちに、当該業界に就職することは、私がアルバイトを通じて見知った教育にかんする諸課題（例：いわゆる教育格差や、保護者も含めた教育への向き合い方、教育を「ビジネス」とすることの弊害など）を解決しきることには必ずしもつながらないのではないかと感じていた。そもそも小中高の教員になると課題解決以前に忙殺されるのではないかと直観していたので、私は、教育業界そのものにおいて働くことを断念し、むしろ情報や言論に与る業界への就職を目指した、という経緯もあった。

もちろん、上記のような他の理由は、私の個人的な経験によるところが大きく、客観的な基準とは言えない。しかし、これらの経験は、研究者になるか就職をするか、あるいはどこに進学するかといった、私の諸進路選択を大きく左右したものであって、この体験記に付記しておくことに差しさわりはないだろう。

する際の各就活生の基準のようなものを一般に指す言葉——であり、それを最もよく達成できそうな企業があったからこそ、私は就職活動を選んだ。

1.2 なぜ学部で就職ではなく、修士で就職を選んだのか

そもそも修士課程に進んだ理由は、私がいた学部では研究環境等が十分ではなく、自身の関心に十分沿った研究を進められなかったからである。だから、学部時代での研究活動に満足しきっていたならば、学部を終了した時点で就職していた可能性は大いにある。充実した研究生活を送りたかったそもそもの理由は、自分が好きで得意とする学問分野を、研究を続けるにせよ就職するにせよ、最低限の「武器」にしておきたかったから、という点にある（この「武器」については、適宜後述する）。なぜそれほどまでに研究することを望みながら結局就職を選んだのかについては、1.1 で述べたとおりである。

2.1 どの時期に就職活動を行ったか（始めたのがいつで、どの時期にどのイベントに参加して、どの時期に内定を獲得したか）

ある程度業界をしぼっており（1.1, 3.1）、それらの業界はいわゆる「早期選考」や何らかの選考上の優遇措置などをさほど行っていなかったもので、本格的に就職活動らしいことを始めたのは、修士1年の秋頃からだった。ただし、それ以前でも、複数企業による合同説明会や、簡潔な1日だけのインターンシップや説明会などには少し参加していた。

2.2 どの時期に研究を行い、どの時期に就活を行ったか（あるいは、どの時期に就活と研究を同時に行っていたか）

志望業界の採用フローの関係で、就活に専念していたのは修士1年生の1月から修士2年生の4月くらいまでである。それ以前は、さほど就職活動は気にせず研究等（例：書評や研究ノートの投稿、フランス語検定の受験）も行っていった。

3. どのように就職活動を行ったか

3.1 どのように志望業界・企業を選んだか

1.1 で詳述したような経緯で、マスコミ業界（出版・新聞）や研究開発法人、学校法人などを全般的に見ていた。

3.2 就活対策として、どのようなことを行っていたか

いわゆる web テストの対策や面接練習などを、各種教材や動画サイトでのアドバイス等を参考にしつつ行っていた。その他には、就活サービスを活用してエントリーシートの添削をしばしば頼んでいたくらいで、特別な対策はしていなかった。

上記の「特別な対策はしていなかった」という書き方は、語弊のある表現かもしれないので、少し補足をしておきたい。たしかに私は、いわゆる外資系企業やコンサルティング業界を全く志望しなかったため、そうした諸企業や業界に特有の選考対策はしなかった。あるいは、マスコミ業界に臨むにあたっての対策塾のようなものも利用しなかった。少なくともこの点では、「特別な対策はしていなかった」という書き方に誤りはない。むしろ、エントリーシートや面接の随所で、いわば「私の御社への志望動機は十分であり、かつ、御社が私を採用することによるメリットも大きい」といったアピールができるよう注力した。すなわち、私の側の志望動機（典型的には、1.1 で詳述したような「就活軸」）を明確で十分なものにしようとする以上、そのような私を採用することによる企業側の客観的なメリットをも織り交ぜようとした。そうした努力は、ある意味では「特別な対策」にあたるかもしれない。このような「特別な対策」については、3.5 で詳述する。

3.3（内定先が複数ある場合）どのように就職先を選んだか

これまで説明した入社先以上に入るべき企業が思いつかなかったの、そこに内定した時点で就活を終了した（し、それより前に他企業から内定を得ていたわけでもなかった）。

3.4 科史・科哲院生であるがゆえに苦勞したことはあるか、あるとしたらどのようなものか

科学史や科学哲学といった分野がメジャーではないことや、歴史や哲学を専攻しているのに肩書としては理系の所属であるかのようにうつることなど、比較的稀な所属であることによって、就職活動の様々な場面でのアピールやいわゆる「自己PR」をするにあたって苦勞した。たとえば、研究内容を伝えるときなどは、相当準備をして、かみ砕いて説明をした覚えがある（ただ、こうした所属だったことがかえって「武器」になった面もあり、この点を次の節で取り上げる）。しかし、いわゆる文系院生に共通するような苦勞はいくつか思い当たるものの、科史・科哲院生特有の困りごとは、それ以外にはなかった。

3.5 科史・科哲院生であるがゆえに有利になったことはあるか、あるとしたらどのようなものか

いわゆる「文理融合系」の学生にあたるのが有利にはたらいたふしはあるかもしれない。くだんの入社先では、マーケティングの素養とデータ分析的な思考の両方が強く求められていたわけだが、ちょうどその間をとるような専攻だというアピールができたことが、「武器」になったように思われる（ただし、もちろん私はその両方とも専門ではない）。たとえば、自身の専攻内容を伝える際は、「理系の知見を前提として活用して、社会的な課題に取り組む云々…」とまでかみ砕いて説明していた⁶。もちろん、そうした専攻内容の伝え方につい

6（あくまで私個人の例であるということに注意されたいが）、このあたりの「かみ砕いた」説明について、詳述しておきたい。

私の専攻内容を、とくにかみ砕かず端的に伝えようとする、と、「フランスの（科学）哲学、とくにアンリ・ベルクソンの哲学を専門とする。とくにベルクソンのエラン（élan）という概念の分析を中心に、彼の生命哲学を再構成することに注力している」といったところになるだろう。

ては、志望する企業や各自の「就活軸」に応じて適宜調整すべきだし、結局のところ、いわゆる「論理的思考力」が十分にあるかどうかという点こそが就職活動を大きく左右するのかもしれない（コンサルティング業界等を志望するのであればなおのことであろう。この点についての詳細は武田氏の体験記を参照されたい）。そして、そうした「論理的思考力」は、明らかに科史・科哲という環境で大きく鍛えられたように思われる。

4. 「研究」への思い

1.2 において私は、自分が好きで得意とする学問分野を、就職するための最低限の「武器」にしておきたかったと述べた。それがどのような点で「武器」たりえたのかについては、各節で回顧したとおりである。しかし、その「武器」をいわば鋭利にできたのは、私が科史・科哲に入ったからだと言っても過言ではない。先述した「論理的思考力」はもちろんのこと、歴史的・今日的な科学の知見を取り入れて（、あるいはそれらを取り入れるとはどういうことなのかについても吟味しつつ）、歴史・哲学研究を行う科史・科哲に所属し、ゼミや

しかしこれでは、哲学にある程度親しんでいる人でないとその専攻内容を推測することすら困難だろう。さらに、企業側が専攻内容について就活生に質問する際には、（もちろん就活生の専攻内容自体に関心があった可能性もあるが）、「その専攻内容が当該の企業や職種に対してどう資するのか」を知りたいというケースが多いだろう。

このような推測のもと、私は、「自身の専攻に明るくない人に対しても伝わりやすいような」、そして、「それを専攻していることが当該の企業や職種に対してどう資するのかが分かりやすいような」伝え方を心がけた。これらを踏まえた文言の一例としては、「文理融合系の専攻に所属し、いわゆる科学哲学・生命哲学を専門とする。たんなる思弁だけでなく、理系的な知見やデータを前提として、社会的・哲学的な問題を解決することを試みている」などを用意していた（なお余談となるが、このようなことを述べた際にその具体例を求められ、慌ててとっさに実験哲学の紹介をしたことがある）。

もちろん、上記のようにして専攻内容を伝えたとて、私の入社先の職種が求めるような、マーケティングの素養やデータ分析的な思考には必ずしも結びつかないであろう。しかし、このあたりの結びつけをこれ以上試みようとする、実態と全く異なるものになってしまうので、そうした企業側のニーズに応じた人材であるというアピールは、いわゆる社員の方々との座談会やインターンシップで都度試みるようにしていた。つまり、専攻内容を伝える際には、その実態からあまりにかけ離れることなく、しかし、少なくとも各企業側のニーズに資する可能性が無視できない程度にはあると理解されるような内容を目指すことが重要であるように思われる。

普段の授業から得られる刺激は自身の研究にとって大いに役立った。とりわけ、ベルクソンを中心とする科学史や哲学的諸問題にずっと関心を持ち続けていた私が、その問題関心を鋭く絞り込めたのは、他ならぬ科史・科哲の環境に身を置いたからこそであると感じている。そのおかげもあって、この体験記と並行して執筆している修士論文は順調であり、これをただ提出して済ませるのは勿体ないという思いもある。つまり、せっかく学部時代以上に深めることができた自身の研究テーマへの未練がないわけではないし、「研究者か就職か」という選択は学部時代から悩み続けてきた（2つが両立できれば申し分ないのだろうが、私はそれほど器用ではないことを痛感している）。しかし、今は悩みぬいた自身の決断やそこから生じた「就活軸」を信じて、入社先での仕事にコミットしてみたいという前向きな思いがある。もちろん、関心のある分野へのキャッチアップは継続したい。自身の修士論文を加筆修正していつかどこかに公開したいとも思うし、何より、ある意味では積極的な動機をもって自身を就職へと向かわせてくれた研究に対する敬意を忘れないでいたいとも思うからだ。

最後に、私の好きなベルクソンの言葉を引用して終えたい。

十分に張り詰められた意志によって打破できないような困難はない。ただし、時機を失せずしてその困難に着手されるならば (Il n'y a pas d'obstacle que des volontés suffisamment tendues ne puissent briser, si elles s'y prennent à temps) ⁷。

7 Bergson, Henri (1932/2016), *Les deux sources de la morale et de la religion*, PUF, édition critique, p. 313.

「エントリーシートの締切 20 分後に締切を確認するべきではない」

武田 光藍

0. 自己紹介や入社先など

分析言語哲学を専攻しており、その中でも社会的・政治的な文脈における我々の言語実践が持つ問題や、その問題への対処について理論的に研究している。特に、社会においてある種の概念が共有されていないことがもたらす社会的害、というテーマに強く関心を持っており、修士論文においてはミランダ・フリッカー⁸が提起した解釈的不正義についての研究を行っている。修士課程を無事に卒業できたならば、その後はコンサルティング系の企業に入社する予定である。

1.1 なぜ進学ではなく就職活動を選んだか

(おそらくは就職活動を選ぶ大学院生の間では) ありふれた動機ではあるが、将来的な見通しの不透明さを解消するために、進学ではなく就職を選んだ。就職活動をする中で、「大学での研究や、研究室での生活スタイルなどが嫌になった」という人々にも出会ったが、私にとってはこのような点は就職に対する大きな動機とはならなかった。むしろこの研究室での活動は大学生活全体の中でもとりわけ有意義な時間だったと考えている。また、アカデミックな生活においては、他の研究について読み(あるいは聞き)、自身の研究を進めていくという営みが日常の大部分を占めることについても好ましく感じている。以下では、私が最終的に就職活動を選んだ最も重要な動機である、将来的な見通しの不透明さについて詳述する。

8 Fricker, Miranda (2007). *Epistemic Injustice: Power and the Ethics of Knowing*. Oxford University Press.

まず、大学で博士号の取得を目指し、アカデミックな分野のポストで職を得て、生計を立てるというキャリアを歩む上では（科学史・科学哲学研究室に限った事ではなく）、将来の見通しに関する不安や悲観を払拭することは難しいだろう。次節でも触れることだが、私は元々博士後期課程進学を目指していたものの、パートナーからはアカデミックなキャリアの不安定さや、将来設計の難しさといった観点から強固な反対を受け、進学と就職活動の葛藤を抱えることとなった。

この葛藤において最も大きく影響した（と私自身が考えている）ことは、修士課程においてあまり実績を残すことができなかつた、ということである。修士課程在学中に、奨学金などへの応募や、査読誌への応募などを行ったが、それらに採択されることはなかつた。実際には、アカデミックなキャリアを歩む上で修士課程での実績の多寡それ自体は実のところあまり重要ではないのかもしれない。しかし、自分自身が修士課程に在籍する時点で、これ以後もアカデミックなキャリアにおいて活躍（哲学史に名前を刻むというレベルではないにせよ）できる、ということを経験した相手に（あるいは自分自身に対して）示すためにはそのような実績は非常に重要だと思われた。その点に関してなにか証拠として提示できる実績を作ることが出来なかつたことは、私にとっては就職活動を行う決め手となった。

ただし、十分な実績があつた場合でもパートナーから強固な反対を受けたかもしれない（というよりは、受けたらろうと言うべきかもしれない）。その場合にも結局パートナーからの意見を尊重して就職活動を選んでいたかもしれないので、実のところ実績はあまり関係なく、アカデミックなキャリアが持つより構造的な不安定さ自体がより重要な理由だったのかもしれない。例えば、アカデミックなキャリアとして比較的順調とされるキャリアパスを想定したとすると、博士後期課程に数年在籍し、博士号を取得した後にポストドクターとして数年職に就いて、その後パーマネントなポストを獲得する、といったものが挙げられるだろう。そのキャリアパスにおいては、結局博士後期課程からポストドクターの間は期限付きの被雇用者として過ごさざるを得ないし、経済的に安定していると言えるほどの資産を形成することが（不可能ではないにせよ）遅

くなってしまう。このような不安定さへの（私自身の、そしてパートナーの）不安も、最終的な意思決定において大きな役割を果たしたと思われる。

1.2 なぜ学部で就職ではなく、修士で就職を選んだのか

1.1 節で述べた通り、元々は博士後期課程に進学し、アカデミックなキャリアを歩むことを目指していたので、学部時点では就職を選ぶという選択肢をあまり考慮していなかった。また、それに加えて学部の比較的早い段階から、漠然とだが、分析哲学に対しては他の分野よりは強い興味を抱いていながらも、様々な事情が重なり、所属する学科内に分析哲学を専門とする教員が一人もいない中で卒業論文を書かざるをえなかった。そのため、修士課程までには分析哲学を確実に学べる場所に所属したい、という思いも強く抱いていた。

2.1 どの時期に就職活動を行ったか（始めたのがいつで、どの時期にどのイベントに参加して、どの時期に内定を獲得したか）

修士1年の11月頃から本格的に様々な企業への応募を始め、最終的には修士2年の5月に就職活動を終えた。実のところ、私はあまり「インターン」（と呼ばれる、実際のところは1日～数日程度にかけて行われる業務体験イベントに近いもの）には参加していない。そのような「インターン」の選考においては、本選考の場合と比して、書類での通過率が非常に悪かった。コンサルティング系企業その他、広告代理店、飲料メーカーなどの「インターン」への応募を行ったが、一度も最後まで選考を通過しなかった。12月頃から様々な企業の本選考への応募を始め、1月～2月にかけては応募書類の作成、Webテストと面接、そして結果通知をウネウネとしながら待つ時間を繰り返していた。3月に最初に内定を獲得してからはペースが落ち、最終的には5月までは就職活動を行っていたが、その間には2,3社ほどの選考プロセスに参加するのみであった。ただし、就職活動においては説明会や懇親会、座談会等と名付けられたイベント（大抵の場合これらは選考なしで行けることが多く、また複数企業が合同で開催する場合もある）があり、大抵の場合これらは応募するために参加が必須であ

る。それを踏まえて、私はそのようなイベントに関しては、最終的に応募しなかった企業も含めて、11月頃～3月にかけては数十社分参加をした。参加をしてみると、これらの説明会では日本で働ける様々な企業の業務内容や特徴に関する非常によくまとまった情報が提供されることが多いので、私個人にとっては有意義な時間だったと感じられた。

2.2 どの時期に研究を行い、どの時期に就活を行ったか（あるいは、どの時期に就活と研究を同時に行っていたか）

修士1年の11月～12月にかけては、研究活動と並行して就職活動を行っていたが、1月～2月にかけては就職活動に専念していた。3月以降は徐々に生活における就職活動の割合が下がり始め、研究活動とも並行して行えるようになった。しかし前節で述べた通り、就職活動終了が比較的遅く、4月の学期初めでは就職活動の都合で研究室のミーティング等を欠席せざるを得ないこともあった。

3. どのように就職活動を行ったか

3.1 どのように志望業界・企業を選んだか

漠然と将来やりたいことや関わってみたい業界などに基づいて“インターン”や本選考への応募を行い、その選考結果や選考プロセスでの感触に基づき、自分のやりたいことと、企業から求められている人物像が合致するように業界や企業を絞り込んでいった。

例えば、コンサルティングに関しては、私の身近な人がコンサルティングに携わっていたことや、当時のコンサルティング業界における新卒需要増もあり、漠然と志望業界の一つに数えていた。そして、特に様々なコンサルティング企業の本選考を受けていく中で、とりわけ（コンサルティング企業の）ケース面接や（こちらも同様にコンサルティング企業の）グループディスカッションを行うことに自分自身では楽しさを見出し、また選考の通過状況も他の業界と比

して良いものだったので、コンサルティング業界を最終的には焦点的に志望した。

これに対して、私は大手飲料メーカーなどへの応募も行ってた。これは私が日常的にスーパーやコンビニなどで並ぶ食品がどのようにして安さ、クオリティ、利益の産出を実現しているか、ということを考えるのが好きだったため、当時、大量生産を伴うような飲食系の企業（ビール、コンビニ、冷凍食品等）に関しても強い興味を抱いていたからである。しかし、こちらは概して芳しい選考結果を得ることはなかった。これらの業界については就職活動を進めるにつれ、焦点的な志望業界からは外れていった。

3.2 就活対策として、どのようなことを行っていたか

私は学部卒業の時点では就職活動を行っていなかった。そのため、まずは科史・科哲を卒業した先輩方や、学部で就職した友人、その他の社会人に就職活動プロセス全般についてインタビューをすることから対策を始めた（9月～11月にかけて）。その後、友人からの紹介で、学生が中心的に運営する就職活動補助コミュニティに参加し、そこで前年度に就職活動を終えた学生からメンターとしてサポートを得て、何度かの面談を通じてケース面接や面接の対策を行い、また面談を通じて就職活動の進め方などについて尋ねた（12月頃～）。それ以外では、ケース面接やフェルミ推定に関する書籍を読んだ後に、パートナーとオリジナルのケースやフェルミ推定の問題を考案し、面接形式で解く、といったことを行った。加えて、面接一般に関しても、主にパートナーと練習をした。Webテストに関しては本番で実際に解くこと以外の対策は行わなかった（が、このようにWebテストへの対策を怠ると、慣れない問題形式に対して対応を誤って非常に不満な結果になる場合もあるので、私はむしろ様々なWebテスト形式への慣れ程度の対策は行うべきだと考えている）。

ここまでで就活対策について述べてきたが、私個人の感じとしては、一番対策として有効で、また慣れにつながったのは、本選考での面接等の経験であった。上述の対策があつてこそ本番での学びがあるということかもしれないが、とりあえず実際の面接に飛び込むのも有意義かもしれない。

3.3 (内定先が複数ある場合) どのように就職先を選んだか

最終的な選択肢があまり多いわけではなく、また志望業界との近さや労働条件などを考慮してもあまり大きな悩みが生じることはなかった。基本的には先ほど述べた、業界と待遇という二つの側面に基づいて選んでいる。

3.4 科史・科哲院生であるがゆえに苦勞したことはあるか、あるとしたらどのようなものか

私にとって、科史・科哲院生であることで最も苦勞した点は、面接官からの共感の得にくさであった。広域科学専攻相関基礎科学系科学史・科学哲学研究室は、改めて指摘すれば、それ自体非常に分かりにくい組織である。総じて「理系」の研究を行う学科に置かれた研究室でありながら歴史と哲学を研究しており、さらに言えば、私のような分析言語哲学の専攻者は、科学哲学を行っているというよりは、むしろ言語についての哲学を行っている。なぜそのような状況なのかを説明するだけでも一苦勞（結局実際の面接であまり触れることはなかったのだが）であり、そこからさらに、科学史・科学哲学研究室で言語哲学を行っている私が、この業界やこの企業を目指す動機が何なのか、といった点を説明し、共感や理解を得るということは非常に難しい。結局のところ志望理由や動機に関しては当時行っていたアルバイトでのエピソードを中心に組み立てることとなった。

また、私の所属する（個別の）研究室は自由放任というよりは日常的に様々なタスクをこなすことを重視する研究室であり、就職活動と研究室の活動の両立に関しては時間や体力のマネジメントがある程度必要かもしれない（尤も、現在のところコアタイムなどが設定されているわけではないので、取り立てて負荷が重いわけでもないとは言えるかもしれない）。

3.5 科史・科哲院生であるがゆえに有利になったことはあるか、あるとしたらどのようなものか

科史・科哲院生であることそれ自体が有利に働くことはあまり多くなかったかもしれないが、科史・科哲の環境において鍛えられるスキルは、就職活動全般において、そして特にグループディスカッションやケース面接といった場においては、非常に有用だった。

グループディスカッションを例にとろう。グループディスカッションにおいては、大抵の場合、次のような役割を各メンバーに割り振る。すなわち、書記、ファシリテーター、タイムキーパー、(取り立てて名前がない場合も多いが) 発言者、発表者である。第一に、書記に関しては、議論を構造化しつつ記録していくことが作業の中心であり、レジュメ作成や、議論内容のレジュメへの反映で培われたスキルがよく活かされた。第二に、ファシリテーターに関しては、ゼミでの発表後に質疑応答を仕切る経験が活かされた。第三に、タイムキーパーに関しては、ゼミで議論時間を決められた枠に収める経験が活きた。第四に、発言者に関しては、(テーマの違いから苦勞する点はあるかもしれないが、) 時間の限られた議論の中でクリティカルな発言を試みる経験が非常に役に立った。最後に、発表者に関しては、ゼミでの時間の区切られた発表を繰り返してきたことで、ほとんど苦勞をしなかった。このように、レジュメを作成し、時間内に発表し、議論を仕切り(その中で自分も発言し)、議論点をレジュメに反映する、という作業を日常的に繰り返す経験が、就職活動の中で(そしておそらくは入社後も) 要求されるスキルの揺るぎない土台を形成した、ということは主張可能だと私は感じている。

4. 「研究」への思い

これまでの自分であれば、いずれはどうかして博士後期課程に入学し、博士号を取得するつもりである、社会人生活と並行して論文を書き続ける人生を歩むつもりである、と回答するつもりであったが、現在は、正直に言えば、迷いが生じている。この迷いは一種のスペクトルとして表現できるかもしれない。一端には、前述のような社会人と並行したアカデミックな活動があり、もう一つの端には、例えば、哲学や研究活動からは離れ、公認会計士などの資格を取

得することを目指す、といったものが挙げられる。そして、その中間には、例えば、この先に得られる哲学研究以外のスキルを活かして概念工学⁹の実装に向けたアプローチをすとか、アカデミックなキャリアを歩むことが持つ構造的な不安定さに取り組むための活動をする、といった試みが挙げられる。

自分がここまで培った専門性をこの先活かさないのは、私個人としてはあまり納得できないかもしれないが、一度就活した以上、アカデミックなキャリアに専念した人々に比肩する業績は築けないかもしれない。あるいは、アカデミックな領域に専念した人とも異なり、そして分析言語哲学を専攻していない人とも違うスキルを持っているのだから、それを活かした活動をするべきかもしれない、等々の悩みが、近頃は尽きない。

しかし、いずれにせよ、自分が今の専門性とはあまり関わりが深くないキャリアを選択し、これから何をすべきか明確な答えがないということは、むしろ自分にとっては貴重なチャンスだと考えている。すなわち、哲学や言語、社会に対してどう向き合っていくか、というテーマを根本的な仕方で考え直す機会を得たのだと私は考えている。今のところは様々な可能性が開かれている、ということが私の答えであり、そこから何を選ぶかは、今後の私にとっての大きなテーマである。

9 本稿においては概念工学を、語や概念の意味、使われ方、理解のされ方等を変化させることを通じて、社会的な公正さや、学術的な明確さ等を様々なコンテキストにおいて実現することを目指す営みとして捉えている。ただし、何を概念工学だと考えるかは多様な立場がある (cf. Plunkett, David & Cappelen, Herman (2020). A Guided Tour of Conceptual Engineering and Conceptual Ethics. In Herman Cappelen, David Plunkett & Alexis Burgess (eds.), *Conceptual Engineering and Conceptual Ethics*. Oxford: Oxford University Press. pp. 1-26.)。